

## 近代のすまいにおける家事労働空間の変容

—丹後地域の養蚕農家における床上家事労働の場合—

町 田 玲 子

### Changing Process in the Space for Housework with Houses in Modern Age

—Case Study of Housework on the Floor in the Silkworm-rearing  
Farmhouses in Tango District—

REIKO MACHIDA

The author investigated on the relation between the plan of farmhouses and the houseworks hold in them by hearing 33 old persons who live in Tango district (Kyoto Pref.), in order to demonstrate how and why housework has changed during the first decades of this century.

The results obtained, are as follows :

1) The space for housework on the floor tended to move from “hiroma” to “nando”, while the plan of silkworm-rearing farmhouses changed from the type of 3 rooms including “hiroma” to the type of 4 rooms.

2) Such a tendency is related with the consciousness of giving importance to a reception space and it, by putting the workspace in the backside of the house, decreased the significance of housework as a means of communication.

(Received July 31, 1984)

#### 1 緒 言

住宅計画において、家事室のあり方についてはまだ確たる方向性は示されていない、家事室とは、今日、「洗たく、裁縫、アイロンなどの作業を行うための道具、設備がまとめて置かれ、家事作業が行われる場」（『建築大辞典』彰国社）とされているように、主として衣類の管理に関わる家事作業専用の室とされている。

このような裁縫などの衣類管理に関わる家事労働空間は、近代のすまいにおいて、どのように考えられていたのであろうか。水や火を扱う家事労働とは異なる

り、床上が行為の場となるが故に、他の生活行為に規制されやすかったと思われる。とくに、生業と生活が同じ屋根の下で営まれる農家の場合、なかでも、生業として養蚕業をも営む農家においては、養蚕が住生活、ひいては床上での家事労働に及ぼす影響は大きいといえよう。

本稿で調査対象としている丹後地域では、明治時代から大正、昭和戦前の各時代を経る過程で、新しい養蚕飼育方法がとり入れられ、一方では間取りの変容もみられる。そこで、本稿では生業の変化が間取りの変容にいかに関わり、その結果針仕事などの、ヘヤを作

業の場とする家事労働に、いかに影響を及ぼしたかについて検討することを目的とした。

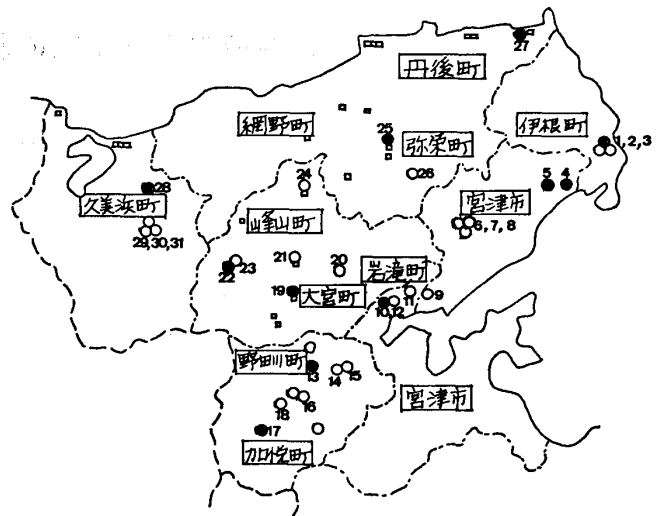
これは、家事労働の場を住宅計画の中でいかに位置づけていくかを示す一資料とするものである。

2 調査方法

調査対象地は、丹後地域のほぼ全域、すなわち、伊根町、宮津市、岩滝町、野田川町、加悦町、大宮町、峰山町、弥栄町、丹後町、久美浜町の1市9町である。

調査対象者は、明治、大正、昭和戦前の養蚕農家のくらしに詳しく、かつ、正確に伝えることの出来る高齢者である。該当する高齢者の選定は、各市町の役場に問い合わせ条件に合う高齢者の一覧表を作成し、それらに基いて訪問聴取し、養蚕経験のある高齢者計33名を決めた。図1に、予備的調査を含めた訪問聴取対象農家全戸の地域分布状況を示し、表1に該当者計33名の概要を示した。後掲の表2は、調査対象者のうち、現住宅でかつて養蚕経営が行なわれた事例を各市

町より1例ずつ（宮津市のみ2例）示したものである。



調査時期 □ 昭和56年7～9月  
●, ○ 昭和57年7～8月  
但し●は、図2～図12に該当する。

図1 聴取対象農家の地域分布状況

表1 調査対象者

番号	性別	生年	現住所	実家所在地	番号	性別	生年	現住所	実家所在地
1	女	明37	与謝郡伊根町泊	伊根町	16	女	大7	与謝郡加悦町後野	加悦町
2	女	明40	与謝郡伊根町泊	伊根町	17	女	明43	与謝郡加悦町滝	加悦町
3	女	明39	与謝郡伊根町泊	伊根町	18	女	大2	与謝郡加悦町加悦	海部村
4	男	明29	宮津市大島	—	19	女	明39	中郡大宮町奥大野	大宮町
	女	明39	宮津市大島	伊根町	20	女	明35	中郡大宮町周枳	岩滝町
5	男	明39	宮津市日ヶ谷	—	21	女	明32	中郡峰山町長岡	弥栄町
	女	大7	宮津市日ヶ谷	野田川町	22	女	明31	中郡峰山町鱒留	峰山町
6	男	明33	宮津市上世屋	—	23	男	明38	中郡峰山町鱒留	—
7	女	明36	宮津市上世屋	宮津市	24	女	明35	中郡峰山町丹波	峰山町
8	男	明33	宮津市上世屋	—	25	男	明27	竹野郡弥栄町和田野	—
9	男	明34	宮津市国分	—	26	女	明41	竹野郡弥栄町味土野	—
10	女	明21	与謝郡岩滝町岩滝	峰山町	27	女	明39	竹野郡丹後町袖志	岡山県 津山
11	女	明30	与謝郡岩滝町男山	宮津市	28	女	明29	熊野郡久美浜町大井	兵庫 但馬
12	女	明28	与謝郡岩滝町岩滝	岩滝町	29	女	明30	熊野郡久美浜町丸山	久美浜町
13	女	明28	与謝郡野田川町下山田	大宮町	30	女	明30	熊野郡久美浜町丸山	久美浜町
14	女	明29	与謝郡野田川町亀山	野田川町	31	女	明30	熊野郡久美浜町丸山	久美浜町
15	女	明40	与謝郡野田川町亀山	宮津市					

番号は、図1の番号と同じ。

調査時期は、昭和56年7月～9月、同57年7月～8月を主とするが、必要に応じて、本年（59年）7月まで、随時補足調査を行なった。

調査内容は、本稿に直接関わるものとして、各へやの使い方、家事労働空間の変遷、間接的なものとして、衣・食・住にわたる生活慣習であった。

なお、これらの調査は、「丹後半島学術調査」の一環である「丹後半島における明治・大正・昭和の衣食住生活・その有様と変容」のテーマのもとで行われた調査の一部である。

### 3 調査対象地の概要

丹後地域の産業経済の特徴は、日本海沿岸部での漁業、山間部での養蚕を主とする農業、平野部での水田耕作を主とする農業、および70年余の伝統をもつちりめん機業などをもつことである。当地域は、農耕利用の主体となる低地平野が少ないことから、養蚕や機織は古くから始められていた。

#### (i) 養蚕方法の変化と蚕室の条件

明治初期までの養蚕方法は放任育であった。桑は田畑に桑園として栽培されることはまれで、多くは家屋まわりの空地や、荒廃地、山地等に植えられ、立木のままであった。保温を必要とする春蚕はあまり飼わずもっぱら夏蚕中心であったので、蚕室についても、防暑防湿のための注意が払われている程度であった<sup>1)</sup>。

新たな飼育法が京都府で伝習され始めたのは、明治10年代の初めの頃である。旧宮津藩士族有志者によって、明治11年には清涼育が、同13年には温暖育が行われたが<sup>2)</sup>、これらは明治20～30年代には折衷育として普及していった<sup>3)</sup>。当時の『京都府農会報』<sup>4)</sup>にも、「質問応答」欄に、「我々貧乏なる農家に適する簡易なる蚕室の構造を承りたし」の文面が見られ、関心の程がうかがわれる。以後、養蚕組合の指導のもとで、保温、および換気の設備の改善が旧来の家屋において実施された。

それぞれの飼育法における蚕室条件の要点をのべると次のようになる<sup>5)～7)</sup>。清涼育は、通風換気に重点をおき棟を高くして、屋根に気抜け窓を必要とした。温暖育は、密室を作り保温して蚕の発育を促進させようとするもので、保温用に床下炉が必要とされた。これらの飼育法をとり入れた折衷育では、蚕室内の空気調整上天窓、欄間、屋根の気抜き窓を設け、天井は熱が放散しない程度の高さの板張とし、間仕切は障子をのぞましいものとした。蚕室の広さは、温度を一定に保ちやすく、かつ作業のしやすいように、6～8帖程

度を基本の広さとして、間仕切次第で小室にも大室にもなることが必要条件であった。

#### (ii) 典型的な間取について

丹後地域の民家は、「丹後型」とよぶ独特の間取り形式をもっていた。これは、平入広間型三間取を基本としている。土間に面した梁行全体を一室とする広間と、その奥の南北に並べた2室（「オモテ」と「ナンド」）の3居室から構成されている。

なかでも、農家の場合は広間の床面より一段低く、板間を土間に向けて張り出した「ロクダイ」部分と、牛小屋である「マヤ」とを持つところに特色をもっていた。

本来の「丹後型」間取りは、明治以後、次第に衰退していき、ほとんどが四つ間取となっていったが、それは、広間に簡単な中間仕切を設け、障子を建てる程度であった。したがって中間仕切をとりはずせば、元の広間型三間取に戻すことが出来て依然として広間型の性質が残されているような四つ間取も「丹後型」といわれている<sup>8)</sup>。

このような広間型三間取が明治以後も残っていることについて、川上らは「蚕室設定の方式に原因することが大きい」<sup>9)</sup>といい、蚕室としての機能を低下させないように「生活上の不便にも拘わらず」<sup>10)</sup>広間を必要とした、と述べている。つまり、広間が残された背景に養蚕をあげている。

では、広間を二室分化させ、四つ間取の住い方を定着させていった要因は何であろうか。本稿ではそれらをまず検討した上で、四つ間取の住い方における針仕事などのへやを作業の場とする家事労働に及ぼした影響について検討していく。

## 4 結果、および考察

### 1) 広間の2室分化をもたらした背景

「丹後型」、すなわち広間型三間取が四つ間取に変化したということは、本稿では、広間に中間仕切を設け、さらには建具を常時建てるようになって2室分の使われ方がされるようになったことを意味している。

以下に現在の住い方の3事例を示す。A・Bの2事例は、広間型三間取の住い方を残している例であり、Cは、四つ間取の住い方の事例である。

#### (i) A農家の事例（図1における⑤）

現当主は、明治39年（1906年）生れであるが、実父（明治15年生れ）もこの家で生れており、当住宅は少なくとも明治15年以前の建築であると思われる（現当主によると、明治期以前の建築であろうといわれる）。

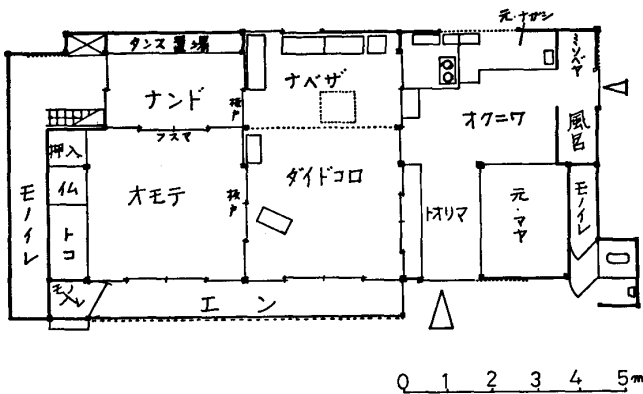


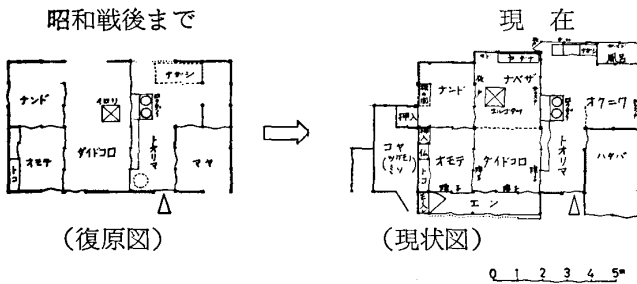
図2 (A農家) A氏宅(宮津市)現状図

現当主A氏の幼ない頃、すなわち明治末期には、広間には間仕切装置はなかった。A氏によると「養蚕のために」大正8年に間仕切装置が設けられ、天井も板張りとなされ、8帖大の稚蚕期用蚕室が作られたことになる。A氏は昭和2年に兵役のために当地を離れ、戦後に妻子を連れて戻ってきたが、当家ではすでに養蚕をやめていたので、広間の間仕切もはずして一室空間としての住み方がされるようになった。そこでは「ナベザ」部分で食事をし「ダイドコロ」部分では子どもがあそび、農閑期には機織りをするなど、多目的な使われ方がされた。冬には広間の中央部「ナベザ」寄りの位置にあるイロリを勢いよく燃やしてへヤ中を暖めることができた。

現在も、イロリは閉鎖されたが、「ナベザ」と「ダイドコロ」間の鴨居下部には建具をたてず、元の広間としての使われ方がされている。

(ii) B農家の事例(図1における㊸)

現当主の母親であるTさんは、明治31年(1898年)に当地に生れ、大正8年に結婚してB農家で生活を始めている。当地は古くから養蚕がさかんで立木作りの桑が至る所にあった。B農家も一時期養蚕を始め、



上図は、「京都府の民家・第1冊」(1966)(京都府教育委員会)を参考にし、聞き取り調査の結果をさらに書き加えた。

図3 (B農家) Tさん宅(峰山町)  
一文久2年(1862年)・築一

その時に広間に中間仕切を設けたが、昭和初期にTさんの夫が病死し、Tさん自身が呉服の行商で生計を立てていかなければならなくなり、養蚕はやめてしまった。B農家については、建築当初の復原図が明らかにされているが、典型的な「丹後型」間取であったことがわかる。戦後、息子が結婚するとき、土間部分を改造し、浴室を設けたが、広間の間仕切装置は外したままで、広間型3間取の使われ方は、その後も続けられた。板敷にムシロを敷き、広間の南側、すなわち「ダイドコロ」では、裁縫をしたり、訪ねてきた人と応対したり、多目的な使い方がされた。電気は、昭和3~4年には通じたが、「ダイドコロ」につけられた電灯のもとで、夜も惜んで針仕事に励んだという。

土間には、今も「ロクダイ」が残っている。「マヤ」は、その後「ハタバ」(機織りするへヤ)として使われた。「オクニワ」では、つけものや、みそを保管していたが、現在は、外の「コヤ」に置いている。

(iii) C農家の事例(図1における㊹)

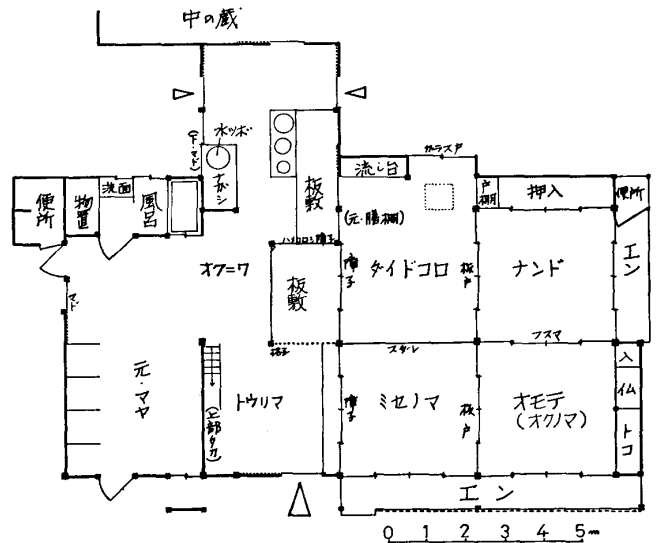


図4 (C農家) Cさん宅(久美浜町)  
—明治28年新築—

C農家で1人住いをしているCさんは、明治29年(1896年)生れである。当家は、明治28年に、前住宅が火災で焼失した跡地に新築されたものである。大正9年に但馬からCさんは嫁いできたが、その頃は、10数人の大世帯であった。母屋には、両親・夫の弟たち・使用人が住み、Cさん夫婦は子どもが2人生れるまで別棟で寝ていた。

養蚕は「ナンド」以外の、「オモテ」、「ダイドコロ」、「ミセノマ」の3室で行われた。「ミセノマ」と「オモテ」には床下炉を設けていた。床下炉は埋薪

法<sup>11)</sup>が用いられ主に稚蚕期のための保温に使われた。壯蚕期には各へヤの間仕切を外し、通風効果を上げたが、養蚕期が終れば、再び建具を建てて、各へヤ毎の使われ方がされた。

Cさんの夫は村長在職中になくなったが、仕事柄接客機会が多かった。したがって、養蚕期以外は「ミセノマ」が対応につかわれ、訪問客が多いときは「オモテ」と続き間にして接客に使われた。「ダイドコロ」にはイロリがあったが、大正9年にはすでに閉じられていて、冬でも中間仕切を建てている状態であった。

以上から、A・Bの事例とCの事例とを比較検討すると、次のことがいえる。A・Bの農家は、もともと広間型三間取であったが、新しい養蚕方法の影響を受けて、簡単な間仕切装置を設けたものの、養蚕期以外は間仕切をする必要もなく相変わらず広間は多目的空間として使われ続けた。一方、C農家は、折衷育が普及し始めた頃に建て替えられたものであるが、イロリが中間仕切の敷居近くにあったことを考えると、当初は広間型三間取であった可能性もある。しかし、その後、広間の二室分化は常態化している。これはC農家が平坦部に位置している上、Cさんの夫の仕事上の接客機会が多く、「ミセノマ」の接客空間としての性格が強まったためであろう。つまり、養蚕方法の変化が、広間の二室分化をもたらす契機となったが、それを定着させた要因の一つとして接客重視の意識がC農家ではみられた。

上記について、さらに確認するために、次にD農家の事例を示す。現在のD農家は近年、建て替えられたものであるが、前住宅以前については、明治26年建築後、住生活の変化に対応しながら順次手が加えられていった。

㊦ D農家の事例(図1における㊦)

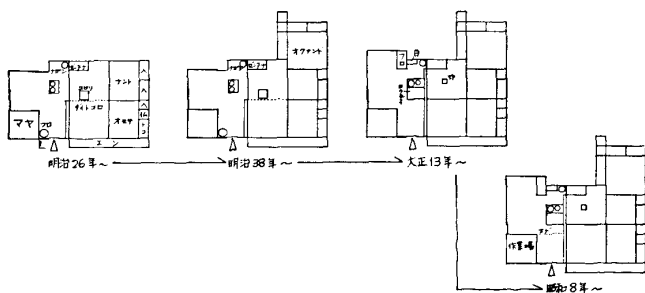


図5 (D農家) H氏宅(弥栄町)

D農家の現当主の父親であるH氏は、明治27年(1894年)に生れ、当地で育った人である。H氏の父親(明治元年生れ)は明治26年に結婚し、農業に従事していたが、明治38年に村長に就任している。H氏の弟妹3

人とも健在であるが、当家は長子であるH氏が後継者となっている。妹Fさん(図1における㊦)は、同じ丹後(峰山町長岡)に在住しており、結婚前のD農家の生活についてFさんにもたずねることが出来た。

明治26年以後の住宅平面図は、H氏の記憶に基き筆者がかいたものである。

明治26年当初のD農家は、養蚕が盛んになりかけた頃だったので、養蚕をしやすいように、通風換気、保温性を考慮して造られた。たとえば欄間を大きくとり、「オモテ」と「ダイドコロ」には床下炉を設けた。広間は、保温がとくに必要とされる稚蚕期以外は、中間仕切もせず、開放されていた。広間南側の「ダイドコロ」では、年に3~4回の養蚕の他、11月の刈り入れ時期には稲の束が積み上げられ、居室として使用できるのは、寒い期間(12月~4月)だけであった。農閑期でもあるこの時期は、広間は家族の集まり場でもあった。あかあかともえるユロリ(イロリのこと)近くで、子どもは本読みをしたり、綿くりやわらじ作りをする年寄とゆっくり話し合ったり、「縁」近くでは嫁が機織をしたり、そして広間の北側、「ナベザ」の膳棚の前あたりでは皆がきめられた席に坐って食事をとったり、時には来客があって、ユロリ近くに招き入れ、歓談したり、という光景が展開された。

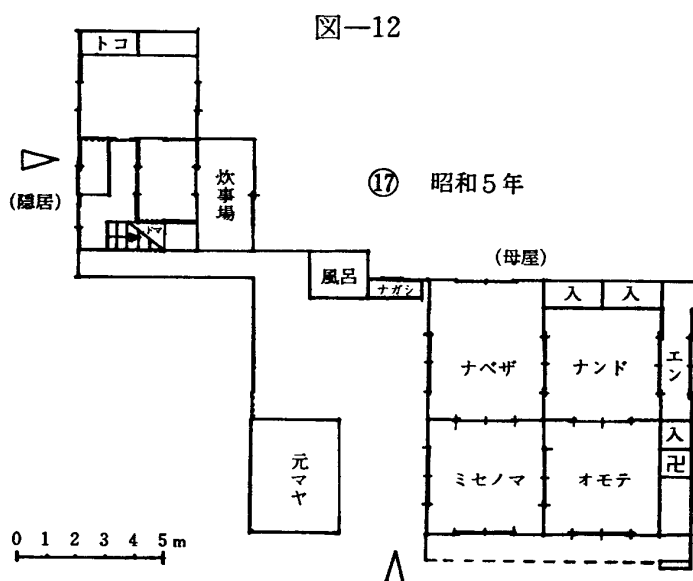
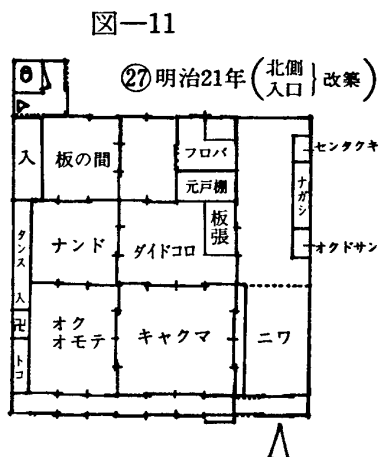
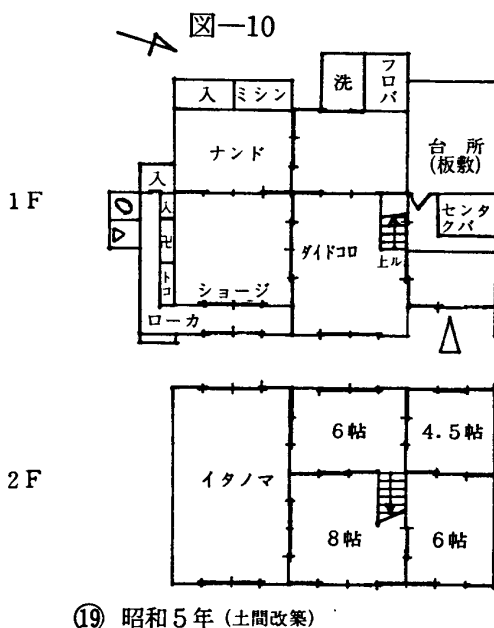
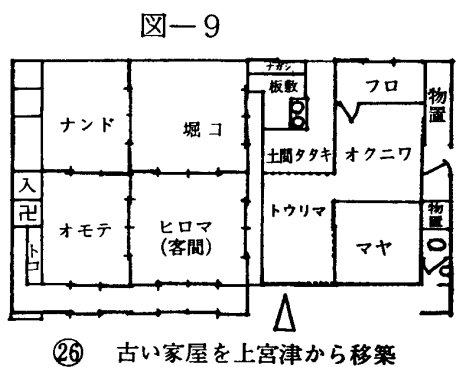
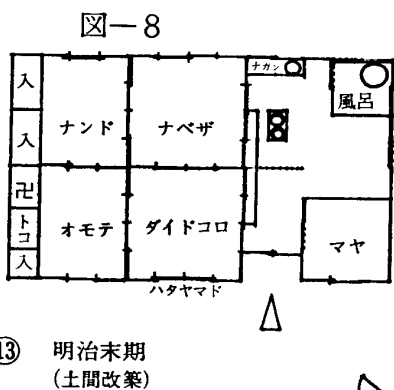
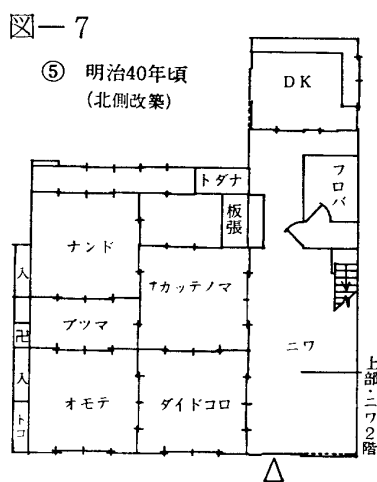
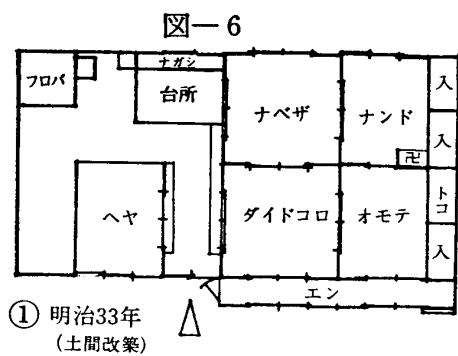
明治38年に、H氏の父親が村長となり、職務上の訪問客が増えたので、客を通すための「オクナンド」が増築された。「オクナンド」近くには「ベンジョ」も設けられた。「オクナンド」は、養蚕期間中には家族の食事だんらんの場にもなった。

「オクナンド」を設けることにより、接客空間が確保されたために、広間の多目的使用を続けることができた。D農家も、明治末期には、広間の二室分化の必要が生じてきた。その理由の一つとして、接客重視の意識が強まったことがあげられる。その頃、H氏の父親は郡会議員まで進出しており、接客機会が増加しただけでなく、一度に多数の来客を迎える機会も増えて、「ダイドコロ」と「オモテ」の2間続きの接客空間が必要とされるようになった。この傾向と相前後して、土間入口付近にあったフロ桶がなくなり、北側の下屋部分に新たに浴室が設けられるようになっていく。この現象は、結果的には家事労働の手間を軽くしたが、動機は「フロが出入口にあるのは体裁が悪いから」とH氏自身も述べているように、来客の視線が意識されるようになった一例といえよう。同様に、広間の中間仕切についても、「ナベザ」における家族生活をさらすのは「体裁がわるい」という意識、つまりは

表2 現存養蚕家屋の近代におけるすまい方（養蚕の影響と家事労働の場）

居住地 (間取図)	図1 の 番号	調査対象者 の 生れ年 (性別)	養蚕の住生活への影響	広間の状況	床上家事労働の場
伊根町 泊 (図6)	1	明治37年 (女)	養蚕時には「オモテ」のたたみは、押入に入れ他室と同様、板敷とした。天井には気抜窓があり、各へやの四隅に蚕棚の支柱(タテリ)を立てる時の溝がある。	床は通常、板敷にムシロを敷いた。イロリを使うために「ナベザ」・「ダイドコロ」の間仕切はしなかった。*初老の祝、の時は、オモテとの間仕切をはずして2間続きとした。	針仕事は「ナンド」でする。「ナンド」の鴨居には、馬ちようちんをかけていた。
宮津市 日ヶ谷 (図2)	5	明治39年 (男) 大正7年 (女)	明治期に、新しい養蚕方法にしたがって、板張天井にかえ、ヒロマには間仕切装置を施し、8帖の小室を作れるようにした。	イロリは昭和10年頃まで使用。その後も、ヒロマの間仕切建具は使わず「ダイドコロ」は子どもの遊び場であった。エンには織機を置いている。	「ダイドコロ」の一隅で、針仕事をしたり、機織りをした。
宮津市 大島 (図7)	4	明治29年 (男) 明治39年 (女)	養蚕時は「ナンド」を除く全室を使うので食事はくらでとった。イロリの火で汚れやすいので、養蚕前は家族中で家の中を拭き掃除した。	ナベザを「カッテノマ」と呼ぶ。「ダイドコロ」の天井は高く、気抜窓もある。	針仕事は、わがへやでした。わがへやである「ナンド」に入ったら、ホッとすることができた。
野田川町 下山田 (図8)	13	明治28年 (女)	広間を二室に分け、稚蚕のための蚕室を作った。養蚕期には、全室使うので家族は「タカ」で寝た。	イロリが中央部にあった。広間が2室分化し、四つ間取となった。現在は「ダイドコロ」南側の開口部は、ハタヤマドに改造されている。	針仕事は「ナンド」で行なった。「ダイドコロ」で行うときは、人がくると手をやすめなくてはならなかったから。
加悦町 滝 (図12)	17	明治43年 (女)	丹後震災後、養蚕を意識して建てた。養蚕時は「ミセノマ」と「オモテ」および「ミセノマ」と「ナベザ」との上階部分が蚕室となった。給桑時には、ナベザからはしごをかけて2階に上った。	冬は、ムシロを敷いたが、夏は板敷。冬は「ナベザ」の出入口に建具を立て、イロリをたいたので、へやは暖かった。夏は建具をはずし「ミセノマ」と二室続けて広々と使った。	針仕事は「ミセノマ」、または「ナンド」で。「ナンド」は自分のへやという思いが強く、入れればホッとした。
大宮町 大野 (図10)	19	明治39年 (女)	ハタヤであったが、昭和8年頃の不況時分より機を休み、義母が養蚕をした。戦前まで。	「ダイドコロ」はもともと、ハタ織の場として作られた。「ナベザ」は食事の場。	針仕事、洗たくものをたたむことなど「ナンド」を中心に行なった。
峰山町 大路 (図3)	22	明治31年 (女)	大正期半ばにしばらく養蚕をした時は、ヒロマに間仕切用の障子を建てた。当地は養蚕がさかんな所であった。	「ダイドコロ」は、平常はムシロを敷いた。たまに客がくる程度で、もっぱら針仕事の場であった。	針仕事は、夜に「ダイドコロ」で行なった。
弥栄町 土野 (図9)	26	明治41年 (男)	養蚕をしていた時の家屋は、昭和26年に焼失。しかし、当家の建物は上宮津から移築したもので、間取は以前と同様。	通常は、広間には間仕切建具は設けず、蚕室にする時のみ障子を建てた。	針仕事や、糸くりなどは広間でおこなった。
丹後町 袖志 (図11)	27	明治39年 (女)	「キヤクマ」(「ダイドコロ」南側の8帖の間)の格天井が高い(約3m)。「養蚕のため、天井を高くとっているが2階がつくれない」とのこと。ヒラモン(平物一巨大な梁)を家族中で拭いた。	「キヤクマ」にはイロリがあった。イロリを焚く時は建具を建てず、家中をススで真黒にした。近所の人達と飲み食いをする場(例、講)であった。イロリには、茶釜をおいていた。	針仕事は、北側の板間で行なった。「キヤクマ」ではほこりが立つから行わなかった。
久美浜町 大井 (図4)	28	明治29年 (女)	「ミセノマ」に埋薪を作り、イロリも廃止した。イロリは、へやを汚すので。「ナンド」以外は、全室、蚕室とし、元ロクダイの板敷を食事ベヤとした。	稚蚕期には保温上、建具を建てたが、養蚕期以外も、常時間仕切はした。職務上の来客が多く「ミセノマ」は接客、あるいは「オモテ」に客を通すときの通路として使われたので、私生活の場である「ダイドコロ」との境は間仕切建具が必要であった。	針仕事は、もっぱら「ナンド」で行なった。エンがあり、明るくて落ち着くことが出来た。

註) 現居住家屋で、養蚕経営が行われた例のみ、とりあげた。したがって、岩滝町では、該当する例が今回の調査では得られなかった。本表には掲載していない。岩滝町については、養蚕経験者に対する聞きとり調査のみ可能であった。



註) 番号は図1の番号と同じ。方位は図10を除く全図とも上が北である。  
 年号は建築時期を示し ( ) は、その後の改築部分を示す。いずれも現状図。

接客重視の意識が作用して、次第に建具を立てるようになっていったものと思われる。

なお、広間の中間仕切の建具が冬期にも常時建てられると、イロリの使用が制限され、イロリが衰退していくことになる。D農家でもこの時期、イロリが閉鎖され、暖房用の炉が新たに設けられた。

以上、D農家の事例にもみられるように、接客重視の意識は、広間の二室分化を定着させる主たる要因となっていた。

## 2) 針仕事などのへやを作業の場とする家事労働 (以下、床上家事労働とする)への影響

A～D農家の事例より、広間では、①食事、②暖をとる、③団らん、④夜なべ仕事(イロリの火も光源の補助的役割を果たした)、⑤子どもの遊び、勉強、⑥針仕事などの家事労働、⑦ハタ織、⑧接客、⑨養蚕、⑩刈りとった稲の一時的保管場所、⑪「オモテ」への通路、などの多様な生活が行われていたことがわかる。

ところが広間が二分化され、その南側部分が接客空間としての性格を強めると、旧来そこで行われていた生活行為が影響をうけることになる。上記①～⑪のうち、⑤～⑪がそれに該当するが、本稿ではとくに⑥、すなわち針仕事などのへやで作業する習慣になっている家事労働への影響について検討してみる。

前述のC農家では、Cさんが母屋に移り住み始めると同時に、「ナンド」が床上家事労働の場となった。Cさん自身は、「ミセノマ」は、他人が来る所だから針仕事などとんでもない」と思っていたという。

D農家では「ダイドコロ」が接客空間的性格を強めていくにしたがい、「オクナンド」が床上家事労働の場になっていった。

調査対象となった他の農家についても、表2に示すように、四つ間取の住い方をする農家では「ナンド」が床上家事労働の場である例が多い。「ナンドに入ったらホッとする」(⑥→図1上の番号、以下同様)、「ナンドは自分のへやという思いがした」(⑱)、「明るくて落ち着くことが出来た」(㉓)のように、「ナンド」を床上家事労働の場とすることに満足している例、あるいは「ダイドコロ」で行うと、人が来たとき手をやすめなければならない」(⑲)、「キャクマ(広間の南側のへや)ではほこりがたつから」(㉔)のように、他のへやよりは「ナンド」の方がまだのぞましいと思う程度に満足している例など、「ナンド」使用に関し、一応は満足していたことがわかる。

一方、広間の一部を床上家事労働の場とする例では「明るくて仕事しやすい」(⑤)「土間に人がきて

もすぐわかる」(㉔)、「仕事をしながらでも対応出来る」(㉔)、などがその理由であった。またD農家のH氏は子どもの頃を思い出しながら「広間で遊んでいる時、母親がハタ織りしながら歌っているのを聞いた。きれいな声だった。」と述べていたが、広間での家事労働は忙しい母親と子どもとのふれあいを可能にする手段ともなっていたのである。

丹後地域の民家の「ナンド」は、「暗い方がお金が貯まる」と昔から言い伝えられているように、窓を小さくとり、昼間でも薄暗いものであった。しかし、明治時代後半以降に建てられた農家は、「ナンド」の開口部分も大きく、C農家のように「エン」も通っている例も見られ、明るさと風通しの点では「ダイドコロ」と同じ条件をもつものであった。

もっとも「ナンド」を床上家事労働の場とすることについて「ホッとする」(⑥)、「自分のへや」(⑱)、「落ち着く」(㉔)と述べられているように、嫁としての拘束感から自分をとりもどす場を「ナンド」にもとめようとしていたとも考えられる。針仕事などの床上の家事労働の作業能率をあげる上で、「ナンド」が選ばれただけではなかったのである。

したがって、接客重視の意識(「家」としての意識)と自分をとりもどしたいとする意識(家事労働担当者個人の意識)とがうまくかみ合い、結果的には「ナンド」志向の傾向をもたらしたが、その傾向から即、床上家事労働の場は「ナンド」のような閉鎖された場所がのぞましいとはいえないだろう。

「ナンド」志向をもたらした過程において、接客重視が床上家事労働軽視を作り出し、「家」重視すなわち嫁の人権軽視が、家事労働の閉鎖性をもたらしていたことを見ず過ごすことがあってはならないだろう。

広間の一部が作業場であった時に、床上家事労働が果たした役割、すなわち、近隣とのつきあいの機会、あるいは家族とのふれあいの機会をもたらしていたことを考えると、床上家事労働の場が閉鎖的になっていくことについては問題だと思われる。

なお、農家における裁縫の場について、「拡げ放しにできるので」座敷をそれにあてている。という報告例があった<sup>12)</sup>。今回の調査では「上等モンの裁縫はオモテです」(㉔)と答えた例はあったが、子どもにさわらせたくないもの、布団の縫いなおしなどへやいっばい拡げるものなど、特殊な場合を除いて「オモテ」で行われた例はなかった。



## 5 結 語

丹後地域に長年住む高齢者を対象として聞き取り調査を行い、間取りの変化をもたらした要因、ならびに間取りの変化や住い方、なかでも針仕事などのへやを作業の場とする家事労働（これを床上家事労働とよぶ）に及ぼした影響について検討し、次のような結果が得られた。

1) 広間型三間取の農家が、広間が二室分化され、四つ間取へと変化していったが、その契機となった要因は新たな養蚕方法が導入されたことであり、それをおし進めた要因は、接客重視の意識が強まってきたことであった。

2) 四つ間取の住い方の一つのあらわれとして、床上家事労働の場が広間の南側部分（「ダイドコロ」、 「ダイドコ」、 「クチノマ」、 「ムカエザ」、 「ミセノマ」などの呼称例があった）から、「ナンド」に移行する傾向がみられた。

3) これを「ナンド」志向とすれば、広間での床上家事労働が果していた、地域あるいは家族におけるコミュニケーション手段としての意義は次第に失われていくことになる。

今日、住宅計画において家事室のあり方が問題にされているが、本報告は、それを農家に関し、歴史的視点から検討したものである。家事労働について、私的行為であり、たとえ家族間であってもそれと気づかれないうちに処理することがのぞましいとする考え方が一般的で、家事労働のための空間のあり方を積極的に検討することすら、軽視する風潮がある。本稿は、それらの考え方を、住い方の変化の中で屈折してあらわれた一現象としてとらえ、失われつつある家事労働の意義を再認識することを示そうとするものである。

おわりに、調査を実施するにあたり、行動を共にしていただいた京都府立大学の、吉野正治教授（住居学科）、畑明美助教授（食物学科）、奥村萬亀子助教授（被服学科）、上野勝代講師（住居学科）、便宜をはかっていただいた峰山町立図書館長田中義一氏、関係各市町の役場の方々、そして、たびたびの聞き取り調査に快く応じていただいた調査対象者の方々に心から

御礼申し上げます。

なお、本研究の一部は、昭和58年5月に、日本家政学会関西支部通算第59回研究発表会で報告した。

(1984年7月31日受理)

## 文 献

- 1) 『養蠶秘録』（上垣守国著・享和3年刊）は後代の蚕糸技術に大きな影響を及ぼしたが、その「上の巻」に蚕室について以下のように記述されている。  
「蚕家作仕様の事、付り屋敷善悪の事。家作は第一暑湿を除る様に高く作るべし。空に風抜の穴又は窓を明け、東面北に戸を明くべし。南はちいさき窓をあけ、何れも戸の明閉自由にすべし。（略）。又寒きとて、蚕に屏風など引廻し、又は紙帳をはりなどし、格別風の入を止め、むさむさとほめかす事悪し。」  
(送り仮名を一部訂正し、一部の漢字を平仮名にかえた。)
- 2) 三橋時雄・荒木幹雄；『京都農業』，4，10（1955）
- 3) 三橋時雄・荒木幹雄；『京都府農業発達史一明治・大正初期』京都府農村研究所，京都府，309（1962）
- 4) 京都府；『京都府農会報』1，明治25年5月5日発行
- 5) 有賀久雄；『養蚕学大要』養賢堂，東京（1963）
- 6) 田中義麿；『蠶学』興文社，東京（1943）
- 7) 小林昌人；『民俗建築』第85号，日本民俗建築学会（1984）
- 8) 京都府教育委員会；『京都府の民家』調査報告，第7冊（1975）
- 9) 川上真，山田幸一，永井規男；『日本建築学会論文報告集』号外（1960）
- 10) 京都府教育委員会『京都府の民家』調査報告，第1冊（1966）
- 11) 埋薪法は、炉の内部で薪を炭化させ、それを再び燃焼させて保温させる方法である。適量の薪材を用いたら、14～15日間は効果を保った。  
その方法は、炉内に外気が入らないように、まずワラ灰を敷き、薪を平行に並べ、間隙に鋸屑をうめ、それを二層、三層と重ねて、上層には粉炭を敷き、粉炭に火を移したのちにさらにワラ灰で5～6 cm 厚さにおおう。温度はワラ灰の厚みを変えて調節する。（養蚕方法については、元養蚕指導をしておられ、現在峰山町文化財保護審議会会長の芝原雄氏にも具体的に説明していただいた）
- 12) 持田照夫；建築雑誌，93，11。（1978）